

kindkopr.ess.com
www.kindkopr.ess.com

海面超上昇
現代文明の毒唾 4

生野以久男

プロローグ

二〇××年

現代文明（現代科学技術文明）には「地球人抹殺実行計画」（現代文明の吐き出す「毒唾」による人類絶滅プロジェクト）が仕組まれていた。仕掛人デカルトが現代文明の暴走を直ちに止めるよう、警告を発した（『デカルトはテロリスト』）。

「デカルトの警告」を受け、現代文明から新しい文明への文明転換の試みが一部ではじまったものの、殆ど省みられることはなかった。

現代文明はひたすら暴走をつづけ、「毒唾」を撒き散らし、地球環境を悪化させていった。人びとは現代文明の暴走を放置したまま、ひたすら現代文明に溺れ、「毒」の盛られた「皿」まで食っていた。

現代文明に溺れた者たちは現代文明の暴走によって生じた地球温暖化などの地球環境悪化を予見することはなかった。たとえ予見していたとしても本気で食い止めようとしなかった。

地球温暖化がはじまり加速しだしても、知らないふりをした。目先のことに囚われ、気付こうとしなかったのだ。責任ある人びとの多くも急激に進行する地球温暖化を見て見ぬふりをした。

地球温暖化は完全に暴走状態となった。

さまざまな対策が考えられ、実行に移されるようになって、文明転換のような根本的な対策を避け、小手先の対策だけだった。現代文明のもとの地球環境との共生を謳い文句にした小賢しい小手先の対策がかえって事態を悪くした。

もはやいかなる対策も手遅れだった。人類は次第に深みに嵌まっていた。

グリーンランドにおいて、地球温暖化の暴走を食い止めるべく、「寒冷化プロジェクト」が秘密裏に決行された。北大西洋へ大量の淡水を放出して地球規模の深層海洋大循環（熱塩大循環）を操作しようとしたのだ。

だが氷床の大崩落によって数メートルの海面の上昇をもたらしただけで、完全に失敗に終わった。

数メートルの海面の上昇によって、沿岸低地は水浸しになり、世界中のデルタ地帯に被害が広がった。

ナイル川、ガンジス川、揚子江、黄河、メコン川、イラワディ川、インドス川、ニジエール川、パラナ川、マグダレナ川、オリノコ川、アマゾン川、ミシシッピ川、ポー川などのデルタ地帯の一部が水没し、一夜にして海岸線が数キロも後退した。

それだけではなかった。そのとき崩れ落ちた大小の氷塊は未知の「殺人ウイルス」に汚染されていたのだ。

海流に流された汚染氷塊が世界の多くの都市を襲った。

現代文明都市東京も広い範囲が冠水し、被害が広がった（『襲い来る殺人氷塊』）。

水浸しから復旧すると、現代文明都市では二酸化炭素の大量放出がふたたびはじまった。大気中濃度はすでに四〇〇ppmを大幅に超え、地球温暖化はさらに暴走しつづけた。

海面上昇による海面の拡がりと海水温の上昇によって、海水の蒸発が一段と盛んになり、大量の水蒸気が上昇気流に乗って上空へ舞い上がる。

赤道付近で形成された巨大な温水塊が海流に乗って北上し、高緯度海域

第一章

1

「喜久枝、立候補すべきよ」

北海道知事の任期満了が近づき、保守系の候補として佐東という男が取りだたされていた。M省の課長経験者だという。道州制となって国から種々の権限が移譲されたが、これを取り戻そうとするかのように、道州知事選挙への中央官庁の元官僚たちの立候補が多かった。

「こんなときになによ。そういうあなたこそ出ればいいじゃないの」

喜久枝は目を大きくして、清子を睨む。

二人は司法研修のときの同期生だった。気心の知れた仲で、二人とも最初から弁護士として、中海清子は東京、本田喜久枝は札幌をそれぞれの本拠地として活動をしてきた。住民側に立ち、環境訴訟で何回も共同して弁護を担当したこともある。

グリーンランド永床大崩壊にともない、東京が水浸しになったのを機に、清子は喜久枝のところに転がり込んだ。東京が復旧すれば戻るつもりでいたが、それ以来、一〇年余、彼女は喜久枝の弁護士事務所に着をおいたままだった。

清子には北海道で実現したい夢があった。

夢を追い求めて北海道を駆け巡っているとき、突然、大波が襲い、急激に海面が上昇した。

島国で海岸線の長い日本は、大津波のような大波の襲来と急激な海面上

昇とよって甚大な被害を被った。東京、大阪、名古屋といった沿岸の大都市は壊滅した。京葉、京浜、名古屋から四日市、それに瀬戸内の太平洋に面した沿岸に連なる工場や発電所、石油タンクや原料タンクなど、工業ベルト地帯も大波をまともに受けた。もちろん、日本海側も、沿岸都市はもちろん、工場地帯や臨海発電所も水没した。

つづいて一〇〇日余におよぶ暗闇の世界があった。ふたたび太陽が顔を出したとき、地球が逆転していた。地球の自転軸である地軸が一八〇度回転してしまっただ。

生きているのが不思議だった。日本全体が壊滅すると思った。

彼女は気が気でなかった。生きているうちに、どうしても夢を実現しておきたかった。さいわい、北海道は比較的被害が少なかった。それでも沿岸低地や平野部は水浸しになり、札幌にも海水が押し寄せてきた。苫小牧などの埋め立てて造成した工業地帯が水没し、沿岸の工場や発電所が操業不能になった。

「落下傘候補に立ち向かうには地元出身者にかぎるのよ」

「政治家たちとグルになって連中には勝ち目がないわよ。やるだけムダだわ。いまさら私たちが出しゃばることはないわ。大体、日本が立ち直れるかどうかの瀬戸際に立たされている時に知事選挙が実施されるとは思えない。代行を決めて、選挙は当分延期よ」

「代行？ 誰が……」

「道議会か、それとも国が臨時措置法をつくってやるんじゃないの」

「北海道が食いものにされるわよ」

清子はおじゃまじゃ頭の右野を思い浮かべた。

県より広域の道州制が採用され、導入されたばかりだった。

「改革したばかりだから制度をすぐ変えることはしにくいだろうが、地方へ移した国の権限を取り戻そうと、彼らの都合のいいように骨抜きにしようとするだろうな。差し当たり、少なくとも今回のような大災害時には中央の方針を徹底しやすい形に地方をもっていこうとするにちがいない」
「それは困るわ」

彼らには北海道の「新しい文明村」化計画などんでもないこととうつるにちがいない。彼女はもっと早く仲間たちの助力を乞うべきだったと悔いた。

「それに、これはまだ推測だが……、彼らは北海道を食糧供給基地化しようとしているようだ」

地球逆転の大波襲来後、世界の食糧需給事情は急速に逼迫した。

一〇メートルを超える急激な海面上昇によって、河川や海岸に面した低地の農耕地の多くが水没した。水没を免れた農耕地でも干害や大雨被害が頻発して、農業生産がた落ちしていた。

これに加え、輸送面で問題が生じていた。大波で大小の殆どの船舶が陸へ押し上げられたうえ、突然の一〇メートルもの海面急上昇は世界中の港湾施設を壊滅状態に追い込んだのだ。

生産面と輸送面との問題発生によって、世界各地で深刻な食糧不足に陥っていた。ことに自給率が低く、長年にわたって海外からの輸入食糧に頼ってきた日本はそのおおりにまともに受け、瞬間に食糧不足が顕在化した。

価格が急騰したと思えば、翌日にはスーパーやデパートの食品売り場からさまざまな食料品が消えてしまった。

米だけは備蓄米を取り崩して供給がなされていたが、これもいつまで続

くか分からなかった。買い占めや横流しが横行し始めた。食糧危機が目の前に迫っていた。

だが、いまだに大波や海面急上昇による被害の実態が正確に把握されていなかった。犠牲者数、罹災者数、喪失した農地面積、本年度の農作物の作付け面積など、不明なものが多かった。それでも当面の食糧不足対策として、食料の確保と増産計画が取り上げられていたのだ。

「地域ごとに自給自足態勢でいくべきじゃないの」

「地方にも水没都市から大勢の避難民が押し寄せてきて、すでに食料の自給自足態勢は破綻しつつある。避難民で急増した人口を養いきれないところが続出しているのだ。なんとかして食糧不足を回避したいところだが、実はもうひとつ問題があるんだ」

右野は声を潜める。

「輸送問題のこと？」

「いや、必要な港湾なら早急に整備すればなんとか解決できるだろう。緊急時には自衛隊の輸送機を使えばいい」

「すると別の問題……」

彼女はじつと右野の顔を見た。無精ヒゲのせいか、やつれて見える。

右野は以前キャリアー組の官僚であったが、三〇歳そこそこで退官してしまった。四人組が究極の環境問題対策として文明転換運動をはじめたとき、かつての同僚たちを集めて組織した研究会で、彼は現行システムの見直し対策を兼ねて新首都建設を提案したことがあった。温暖化による海面上昇を見越して、まえもって水没する首都の予備を用意しておこうというものだった。

そのときは誰も見向きもしなかった提案だったが、東京が水没して息を

彼女は躊躇しておれないと感じた。すぐにも北海道の「新しい文明村」化を具体的に進めたいと思ったのだ。

「日本から独立しようというわけ」

左山が目を輝かせる。

「地球逆転で現代文明の命運は尽きたわ。食糧供給基地化なんてダメよ。もはや命運の尽きた現代文明の肩をもつことはないでしょ。未来の日本、いや、未来の人類のために新しい社会をつくるのよ」

「どんなふうに考えているわけ」

右野が顎の無精ヒゲをつまみながら、呟く。自分の考えを纏めるとき彼の癖だ。

「取りあえず、知事の座を手に入れて、それから『新しい文明村』化政策を推し進めるの。具体的には、まず、食糧の自給自足と環境問題ゼロ社会を目指すことね。環境教育を拡充して、環境倫理を植え付ける。とにかく、『マイナス』最小化の徹底するわ。誰にとっても生きがえのある社会じゃないといけないわね」

彼女はちらっと地之木に目をやった。大きく頷く彼を見ながら、つぶける。

「……最終的には、『循環、共生、連帯』を基本とする誰もが自分の能力を十分発揮できるような人間環境の実現を目指すことだわ」

清子は遠くを見ているのか、焦点のぼけた目を窓に向けたままだ。こんな彼女を喜久枝は珍しそうにしばらく眺めていた。

海面急上昇によって石狩平野のかんりの範囲が水浸しになったままだ。事務所のあるビルからも広がった海が見える。

清子の目にその風景が映っているのだろうか。

喜久枝は彼女に声をかけようか迷った。

「さらに海面が上昇するのかしら」

喜久枝は呟く。清子の目は焦点がぼけたままだ。

「……地球はもとに戻ることがあるのかしら」

喜久枝は幾分声を高める。それでも清子は遠くに目を向けたままだ。

2

「右野さん、それはムリです。当面の食糧不足を解決するのが先決なので。世界の食糧事情を考えれば、早急に国内での増産態勢をととのえる必要がある。いまずぐ食糧の増産可能地域は北海道しかない……」

右野は小柄なせいか幾分見上げるような目を向る小山をじっと見た。かつて机を並べ、互いに言いたいことを言い、議論を戦わせたエネルギーシユな男も頭髪に白いものが混じり、首相補佐官らしい落ち着きがあった。

国家安全保障会議で北海道食糧供給基地化計画が提案されると聞いて、右野は小山を訪ねたのだった。官邸に派遣され、会議の事務局を担当しているという。

「日本の将来を考え、いまこそ、地域ごとの食料自給自足態勢を強化すべきではないのか。食料を自前で調達するなら地産地消方式に限る」

食料の自給自足は「新しい文明村」では当然のことであった。だがこの方式は大都市を生み出した現代文明では切り捨てられてしまったものだった。

